

# X, Ying 構文における Ying 形式の 談話機能と表現効果について\*

<On the Discourse Function and the Expressive Effect of  
Ying Form of X, Ying Construction>

山 岡 實

## は じ め に

次の(A)―(G)で代表される七つのタイプの X, Ying 構文の Ying 形式は、どのような機能を果たし、どのような表現効果をあげているのだろうか。また、どのように解釈されるべきであろうか。

- (A<sub>1</sub>) In the visitor's chair sat Mr Gaitskill, looking ruffled.
- (A<sub>2</sub>) In the center of it, lying back in an armchair, was the lady herself, weeping violently.
- (A<sub>3</sub>) Out came the flight crew, jabbering about the fantastic roast beef at Durgin-Park.
- (A<sub>4</sub>) He turned, and there was Lana, carrying a stack of records in one arm.
- (B) Hassan appeared, bearing a steaming cup.
- (C) There was a frog on the brick walk, squatting in the middle of it.
- (D) The whining puppy sat beside him, licking the child's forehead.
- (E) She looked up at the house, looming up dimly over her in the night sky.
- (F) He stood in the center of the room, looking about.
- (G) I was sitting on a wall just above them, supervising the job.

これらの Ying 形式の示す事態は、これまで、主文Xのある対象についての、補足的に付加された、外面的な物理的状態を表すものと解釈されてきた。この解釈の仕方は、これまでの Ying 形式に対する一般的説明が、ひとえに、脈絡から切り離された単一の文内での、主文Xに対する修飾語という統語的観点からのみ行われてきており<sup>1</sup>、談話 (discourse) における

Ying 形式の機能およびその表現効果については、全く触れられていないことを如実に示すものである。

そこで、本稿では、これらの X, Ying 構文が典型的に現れるのは、物語的テキスト<sup>2</sup>であることに注目し、拙稿（1984）で指摘したように<sup>3</sup>、物語の言語の使用の仕組みを問題にする際に不可欠な視点の問題を導入した認識論的観点に基づいて、冒頭の問に答えていこうと思う。

第1節では、具体例に即して、X, Ying 構文の典型的に現れる脈絡を十分に吟味しながら、Ying 形式が、談話の中でいかなる機能を果たしているかを検討していく。第2節では、前節での機能分析の結果に基づいて、Ying 形式の機能的特性の一般化を試みる。第3節では、Ying 形式の表現効果が何であるかを検討し、さらに、Ying 形式に新しい解釈の仕方を付与していく。そして、第4節では、まとめを行なう。

## 1 具体的分析

視点の問題を取り入れた認識論的観点に基づいて、物語的テキストの中に現れる言語形式の機能分析を行っていく場合<sup>4</sup>、その言語形式によって表されている事態が、誰の視点から見たものであるか、また、誰の視点から語られたものであるかが重要な問題となる。このような観点から具体的に作品の実例を検討してみると、問題の X, Ying 構文の典型的に生起する場面をかなり明確に指定することができる。

以下、X, Ying 構文の典型的に生起する脈絡を十分に吟味し、Ying 形式の機能的特性を検討していく。

### 1.1 X, Ying 構文が知覚者の自然な認識過程を反映している場合

まず、X, Ying 構文は、知覚者の視線が支配する場面、すなわち、知覚者の連続した知覚行為<sup>5</sup>を示す場面で典型的に現れる。一人称小説（first person story —以下 FPS と呼ぶ）の場合、語り手としての“*I*”と SELF（意識を行っている主体）としての“*I*”の視点が支配する場面から成り立っている<sup>6</sup>が、この X, Ying 構文の現れる問題の場面では、常に SELF としての“*I*”からの視線が向けられている。他方、三人称小説（third person story —以下 TPS と呼ぶ）の場合、登場人物の視線か語り手の視線が問題の場面を支配している。したがって、FPS の場合の知覚者は、SELF としての“*I*”で、TPS の場合の知覚者は、登場人物か語り手のどちらかであるということになる。

既述した(A)–(G)の X, Ying 構文のうち、(A)–(D)タイプの構文がこの範ちゅうに属する。X が語順倒置されている場合（1.1.1:Aタイプ）と、Xがふつうの語順の場合（1.1.2:B,C,Dタイプ）とに下位区分し、以下、順次、別個に取り扱っていく。

### 1.1.1 Xが語順倒置されている場合

本来ならば、文末に置かれるべき要素が、文頭に前置され、その前置された要素の後で動詞と主語の倒置が行われた場合で、AタイプのX, Ying 構文がこの範ちゅうに属する。この種の倒置構文は、通例、文の安定性とか強調という観点から説明されるが、脈絡をよく検討してみると、語り手、または、登場人物の連続した知覚行為を反映したものであることがわかる。

前置される要素によって、A<sub>1</sub>タイプ(1.1.1.1:前置詞句)、A<sub>2</sub>タイプ(1.1.1.2:分詞句)、A<sub>3</sub>タイプ(1.1.1.3:副詞的小辞)、A<sub>4</sub>タイプ(1.1.1.4:there)に下位区分し、以下、順次、具体例を見ていく。

#### 1.1.1.1 A<sub>1</sub>タイプ(前置詞句が文頭にくる場合)

- (1) There was something strained in the atmosphere of my father's room. The old man sat behind his table, Chief-Inspector Taverner leaned against the window frame. In the visitor's chair sat Mr Gaitskill, looking ruffled.<sup>7</sup> (Christie<sub>1</sub>: 111)

この事例は、FPSの場合で、SELFとしての“T”の目から見た事態が描写されている。窓枠(window frame)から来客用の椅子(visitor's chair)へ視線を転じると、そこにはMr Gaitskillが座っていて、彼は、怒ったような顔つきをしている、という脈絡である。Xでは、“T”が、前文の窓枠から来客用の椅子へと視線を転じ、次に、その椅子での状態を知覚し、さらに、Mr Gaitskillへと視線を動かしている様子が示されている。Ying形式では、“T”が、彼の様子をうかがうために彼の表情に視線を注いで観察している様子が描かれている<sup>8</sup>。

このように、この場合のX, Ying構文は、知覚者<sup>9</sup>が、存在の場所→そこでの状態→その場所に存在する対象へと視線を動かし、さらに、様子进行うかがうためにその対象の表情を凝視している様子を反映したものである、と言えるだろう。したがって、Ying形式には、知覚者が、Xで知覚した対象の表情を凝視している意識を読みとることができる。

#### 1.1.1.2 A<sub>2</sub>タイプ(分詞句が文頭にくる場合)

- (2) A strange scene met our eyes. The room was Mrs. Opalsen's bedroom, and in the center of it, lying back in an armchair, was the lady herself, weeping violently. (Christie<sub>2</sub>: 93)

この事例も、FPSの場合で、SELFとしての“T”の視点が支配している。その部屋の中央に視線を向けると、肘掛け椅子にもたれて座っている人物がいる。よく見ると、その人物は、Opalsen夫人自身で、彼女は、激しく泣いている、という脈絡である。Xでは、“T”が、肘掛

椅子にいる人物を知覚して<sup>10</sup>、その人物が Opalsen 夫人であることがわかったということが示され、Ying 形式では、なぜ泣いているのかと、その彼女の行為を注視して観察している様子が描かれている。

このように、ここでの X, Ying 構文は、知覚者が、ある場所に、ある状態にいる対象を知覚して同定化し、さらに、なぜという気持ちでその対象の行為に視線を注いで観察している様子を描いたものであると言えよう。したがって、Ying 形式には、知覚者が、Xで同定化した対象の行為を凝視している意識を感じとることができる。

#### 1.1.1.3 A<sub>3</sub> タイプ（副詞的小辞が文頭にくる場合）

- (3) The double door now parted. Out came the flight crew, jabbering about the fantastic roast beef at Durgin-Park. (Segal: 36)

(3)は、TPS の場合で、登場人物 Bob の視点が支配する場面である。庶子の Jean-Claude が、税関から出てくるのを今か今かと待っていると、ついに、税関の両開きドアが開く。そこから出てきた人物は、飛行機の乗務員で、何やら早口でロースト・ビーフのことをしゃべっている、という脈絡である。つまり、Xでは、Bob が、税関のドアから出てきた人物を知覚して<sup>11</sup>、その人物が飛行機の乗務員であることがわかったということが示され、Ying形式では、その人物の行為にじっと視線を注いでいる（むしろその人物のしゃべっていることにじっと耳を傾けていると言った方が適切かもしれない）様子が描かれている。

この場合の X, Ying 構文は、知覚者が、ある場所から出現した対象を知覚して同定化し、さらに、その対象の行為を凝視している様子を表したものであると言えるだろう。したがって、Ying 形式には、知覚者が、Xで同定化した対象の行為を凝視している意識を読みとることができる。

#### 1.1.1.4 A<sub>4</sub> タイプ（there が文頭にくる場合）

ここで取り上げる there 構文は、一見、以下で述べる C タイプの there 構文と類似していて混同されやすいが、限定的な (definite) 要素（この場合固有名詞）を含むという点で異なっている。つまり、限定的要素を含む場合、there 構文の there は、場所の意味を含み、1.1.1.1 の場合（A<sub>1</sub> タイプ）の前置詞句と同様な働きをする。したがって、この there 構文も、この A タイプの範ちゅうの一つに入ることになる。FPS と TPS の場合、一例ずつあげておく。

- (4) I was feeling pretty bad about it when Bouncer suddenly raced off up the bank

and started playing in a patch of long grass. And there was Cindy, looking very down in the mouth. (R. D.<sub>3</sub>: 140)

- (5) He turned, and there was Lana, carrying a stack of records in one arm and a pile of paper plates in the other. (Kotzwinkle: 54)

(4)は、FPS の場合で、SELF としての “I” の目から見た事態が描かれている。愛犬 Bouncer が土手を急いで駆けあがり、背丈のある雑草の繁茂する草むらの中で遊び始める。よく見ると、その草むらに居るのは、行方不明になっていた愛犬の Cindy で、まったく元気のない、しょげた表情をしている、という脈絡である。この場合、Xでは、“I” が、草むらをじっと眺め、そこに居るものを知覚して、それが Cindy であることがわかったということが示され、Ying 形式では、Cindy の様子をうかがうために、その表情をじっと見つめている様子が表されている。

(5)は、TPS の場合で、and 以下が示す事態は、he がふり返った時、he の目から見たものである。he は、何年ぶりかで再会した老教師から何とかして逃れようとしている。言い訳を述べて、退席しようとふり返ると、そこに居るのは、思いがけずも Lana で、手にレコードや紙の皿をたくさんもっている、という脈絡である。この場合、Xでは、he が、ふり返った時、そこに居る人物を知覚して、それが Lana だと同定化したことが示され、Ying 形式では、なぜ、その場所に Lana が居るのかと、彼女が手にレコードと皿をもっているのをじっと眺めて推察している様子が描かれている。

ここでの X、Ying 構文は、知覚者が、まず、存在の場所を、それから、その場所に存在する対象を知覚して同定化し、さらに、ある関心のもとにその対象の状態を凝視している様子を表している。したがって、Ying 形式を通じて、知覚者が、Xで同定化した対象の状態を凝視している意識を読みとることができる。

### 1.1.2 Xがふつうの語順の場合

Xが出現動詞 (verbs of appearance) を含むBタイプ (1.1.2.1)、Xが there 構文を含むCタイプ (1.1.2.2)、Xが「空間における位置」を示す動詞 (locative state verbs) を含むDタイプ (1.1.2.3) が、この範ちゅうに属する。以下、順次、具体例を見ていく。

#### 1.1.2.1 Bタイプ (Xが出現動詞を含む場合)

- (6) “We can now sleep in peace,” he declared happily. “...My head, it aches abominably. Ah, for a good tisane!” As though in answer to prayer, the flap of the tent was lifted and Hassan appeared, bearing a steaming cup. (Christie<sub>2</sub>: 86)
- (7) In the instant when the open doors revealed the Customs area, Bob craned his

neck and tried to glimpse inside.... The doors now opened once again. This time a stewardess emerged, carrying a green leather valise and leading a tousle-haired little boy who was clutching a TWA flight bag close to his chest. (Segal: 36)

(6) は、FPS の場合で、SELF としての “I” の目から見た事態が描かれている。幕舎の垂れ幕があがると、Hassan が現れた。手には、湯気の立っている茶わんをもっている、という脈絡である。つまり、Xでは、幕舎の垂れ幕があがった後、SELF としての “I” の目に入ってきた事態、すなわち、Hassan が現れたことが示され、Ying 形式では、Hassan の出現を認識した後、湯気の立っている茶わんをもっている状態に、ある期待をもって<sup>12</sup> 視線を注いでいる様子が描かれている。

(7)は、TPS の場合で、Bob の視点が支配している場面である。税関のドアが開くと、こんどは、スチュワーデスが現われた<sup>13</sup>。手には、緑色の革のスーツ・ケースをもち、髪のくしゃくしゃの少年を連れている。その少年は、胸元にしっかりと旅行かばんを握りしめている、という脈絡である。この場合、Xでは、税関のドアが開いた後、Bob の目に入ってきたスチュワーデスの出現が描かれている。Ying 形式では、Bobが、ある種の期待のもとに、スチュワーデスがスーツ・ケースをもっている状態を、それから、少年を連れている状態を見つめている様子が表されている<sup>14</sup>。

このように、Bタイプの X、Ying 構文は、知覚者が、ある対象の出現を知覚し<sup>15</sup>、さらに、ある関心をもってその対象の状態を凝視している様子を描いたものと言えるだろう。したがって、Ying 形式には、知覚者が、Xで知覚した対象の状態を凝視している意識を読みとることができる。

#### 1.1.2.2 Cタイプ (Xが there 構文を含む場合)

(8) She took my hand and we went on past the barn and through the gate. There was a frog on the brick walk, squatting in the middle of it. Caddy stepped over it and pulled me on. ‘Come on, Maury,’ she said. It still squatted in the middle of it. (Faulkner: 28)

(8)は、FPS の場合で、れんがの小道にかえるがいて、そのまん中にうずくまっている、という SELF としての “I” の目から見た事態が描かれている。この場合の there 構文は、1.1.1.4 の there 構文と異なって、れんがの小道にいる対象の同定化よりも、れんがの小道にいる対象の存在を表しているものである。つまり、れんがの小道にいるかえるの知覚を存在という形で表したものである<sup>16</sup>。この場合、Xでは、“I” がれんがの小道にいるかえるを知覚したことが

示され、さらに、Ying 形式では、そのかえるが次にどうするのかと思い、そのうずくまっている状態を注意してじっと見つめている様子が描かれている<sup>17</sup>。

ここでの X、Ying 構文は、知覚者が、ある特定の場所にいるある対象を知覚し、ついで、ある関心のもとにその対象の状態を凝視している事態を表している。したがって、Ying 形式には、知覚者が、Xで知覚した対象の状態を凝視している意識を感知することができる。

#### 1.1.2.3 Dタイプ（Xが「空間における位置」を示す動詞を含む場合）

- (9) A flash of super-vision penetrated the grain, to the place where Ricky, in a fit of boyish abandon had knocked himself out on a stone. The whining puppy sat beside him, licking the child's forehead. (Kotzwinkle: 108)
- (10) On the land, at the end of the dock, stood two Esso gassoline pumps... Beyond them was a two-story warehouse surrounded by truck sheds. A mountaneous stack of five-gallon cans stood nearby, gleaming in the moonlight. (Corder: 175)

(9)と(10)は、共に、TPS の場合で、(9)では、Superman の目から見た事態が、(10)では、語り手の目から見た事態が描かれている。

(9)の場合、Xでは、Superman が、くんくん泣いている小犬→その状態→存在の場所へと視線を動かしている様子が示され、さらに、Ying 形式では、小犬が何をしているのかと思いその小犬の状態を凝視している様子が描かれている。また、(10)の場合、Xでは、語り手が、山のように積みあげられた石油かん→その状態→存在場所へと視線を動かしている様子が示され、Ying 形式では、その石油かんの状態を凝視している様子が描かれている。

ここでの X、Ying 構文は、知覚者が、対象→その状態→存在の場所へと視線を動かし、さらに、ある関心をもってその対象の状態を凝視している様子を表している。したがって、Ying 形式には、知覚者が、Xで知覚した対象の状態を凝視している意識を読みとることができる。

#### 1.1.3 Ying 形式の機能

以上のように、この範ちゅうの X, Ying 構文は、対象を知覚したり、対象を知覚に基づいて同定化した後、さらに、関心のある部分を注意して見るという人間の自然な認識過程を反映している、とすることができる。つまり、Xは、(視線の移動を伴う) 対象の知覚、また、知覚に基づく対象の同定化などを示し、Ying 形式は、知覚者が対象の中で最も関心のある部分を凝視している意識を反映している、とすることができる。

したがって、Ying 形式の機能は、知覚者（SELF としての “I” (FPS の場合)、ある登場人物か語り手 (TPS の場合)）が他の登場人物の状態か行為、また、事物の状態を凝視している意識を反映することにある、と規定することができる。

この Ying 形式の機能の正当性は、これまで見てきた事例の脈絡から充分明らかであるが、さらに、この機能を確証する裏づけとして次の二つのことをあげることができる。

一つは、われわれの知覚は、通例、全体を背景にした、部分や要素への注意と呼ばれる行動によって成立している、という心理学的原則である<sup>18</sup>。全体とは、Xで知覚されたり、同定化された対象のことを意味し、部分や要素への注意とは、Ying 形式で示される、関心のある部分への知覚者の凝視を意味する。つまり、X、Ying 構文は、上記の心理学的原則に合致する知覚行為を表すものであり、それゆえ、Ying 形式は、対象のある部分を凝視している意識を反映している、と行うことができる。

もう一つの正当性を裏づけるものは、次のような進行形を含む事例との平行的関係である。

- (11) Several feet from the table, Michael came to a sudden halt. He raised a hand to shield his eyes from the glare of the drop light. Beyond the table stood a gaunt young American who was watching the players dispassionately, and slowly winding a red cloth around his neck. (Corder: 177)
- (12) In a corner, near the door and sitting at a table with a child, was Henry Macy. He was drinking a glass of liquor, which was unusual for him,... (McCullers: 47)

(11)は、A<sub>1</sub> タイプに、(12)は、A<sub>2</sub> タイプに対応し、(11)は、

Beyond the table stood a gaunt young American, watching the players dispassionately, and slowly winding a red cloth around his neck.

と、(12)は、

In a corner, near the door and sitting at a table with a child, was Henry Macy, drinking a glass of liquor...

と言い換えても、ほとんど同じ意味内容を表していると言ってよいだろう。つまり、Aタイプ の Ying 形式は、進行形と同じ機能を果たしているということになる。

ところで、この進行形の機能というのは、拙稿(1982)で指摘した「凝視」の機能<sup>19</sup>のことを意味し、知覚者がある対象を凝視している状態を表出するもので、まさに、本稿での Ying 形式の機能と一致するものである。以上のように、進行形を含む (11)と(12)の事例は、本稿での



Ying 形式の機能の正当性を裏づける重要な証拠の一つと言ってよいだろう。

## 1.2 X と Ying 形式の間に視点の切り替えが起こる場合

既述した(A)―(G)の X、Ying 構文のうち、(E)―(G)タイプの構文がこの範ちゅうに属する。X が知覚・認識動詞を含む場合 (1.2.1:Eタイプ) と、X が「空間における位置」を示す動詞を含む場合 (1.2.2:F,Gタイプ) とに下位区分し、以下、順次、具体例を見ていく。

### 1.2.1 Eタイプ (Xが知覚・認識動詞を含む場合)

- (13) Nick went out. As he shut the door he saw Ole Anderson with all his clothes on, lying on the bed looking at the wall. (Hemingway: 68)
- (14) She looked up at the house, looming up dimly over her in the night sky. (Murdoch: 36)
- (15) I leaned my head against the bark and closed my eyes. I could see Herr Farrenen, looking just as I had imagined him, standing over me. (R. D.: 121)
- (16) She walked in the direction of the solitary child. And now, to her dismay, she saw it was Jean-Calude, sitting on his haunches, digging in the sand. (Segal: 74)

(13)は、TPS の場合で、X では、「Ole Anderson が見えた」という he (Nick) の知覚が、第三者（語り手）の立場から、すなわち、he の外側から描かれている。他方、Ying 形式では、he が Ole Anderson を知覚した時の知覚内容、つまり、he の目から見た Ole Anderson の状態が表されている。

(14)も、TPS の場合で、X では、「その家を見上げた」という She (Dora) の知覚がその登場人物の外側から描かれ、Ying 形式では、その she が知覚した時の she の目から見た家の状態が表されている。

(15)は、FPS の場合で、X では、「Herr Farrenen を見ることができた」と語り手としての “I” の立場からの描写が示され、Ying 形式では、SELF としての “I” の目から見た Herr Farrenen の状態が表されている。

(16)は、TPS の場合で、X では、she (Sheila) が砂浜で遊んでいる子供を知覚して、それが Jean-Claude だと同定化した、と she の外側から she の認識が示されている。一方、Ying 形式では、その認識した時の she の目から見た Jean-Claude の状態が描かれている。

以上のように、Eタイプの X、Ying 構文では、まず、ある登場人物がある対象を知覚した、また、知覚に基づいてある対象を同定化した、と第三者的立場からその人物の知覚・認識が示

され、それから、視点が転換して、その時のその登場人物の目から見た知覚内容、つまり、その登場人物が他の登場人物、または、事物の状態を知覚している意識が表されている。

なお、絶対的分詞構文と呼ばれている構文を含む、次の事例も、同様な説明が可能である。

(17) He stared at the traffic below, each detail of it growing rapidly larger (Kotzwinkle: 135)

(18) Binnie looked up and I saw him clearly in the mirror, dark eyes burning in that white face. (Higgins: 40)

各々、下線部では、he および SELF としての “I” の目から見た知覚内容が描かれている。

### 1.2.2 Xが「空間における位置」を示す動詞を含む場合

Ying形式が、知覚者の知覚している状態を示すFタイプ(1.2.2.1)、Ying形式が、SELFとしての“I”のある行為を体験している状態を示すGタイプ(1.2.2.2)がこの範ちゅうに属する。

#### 1.2.2.1 Fタイプ

(19) He colsed the door. He stood in the center of the room, looking about. Bland wallpaper. A flimsy bed. A plastic-topped night table... (Corder: 130)

(20) The gunner stood expectant on the cannon platform, feeling the air rush by as the ship picked up to full speed. (R. D.<sub>2</sub>: 138)

(21) I stood at the door of the tent some time after underessing, looking out over the desert. (Christie<sub>2</sub>: 86)

(19)は、TPS の場合で、X では、語り手により、he が部屋の中央に立っていたことが提示され、Ying 形式では、視点が語り手から he 自身に移行し、he の部屋を眺めている意識が描かれている。後続する Bland wallpaper 以下の文は、he 自身の目から見た部屋の中の描写である。

(20)も、TPS の場合で、X では、語り手により、砲手が砲床台の上に立っていたことが示され、Ying 形式では、視点がその砲手に移って、その砲手の、風が猛烈な勢いで当たるのを感じている意識が描かれている。

(21)は、FPS の場合で、X では、語り手としての “I” により、自分自分が幕舎のドアの所に立っていたことが示され、Ying 形式では、視点が SELF としての “I” に移って、この “I” が砂漠をじっと見つめている意識が描かれている。

### X, Ying 構文における Ying 形式の談話機能と表現効果について

このように、F タイプの X、Ying 構文では、まず、語り手（第三者）の立場から、ある登場人物がある特定の場所に、ある状態でいたことが提示され、それから、視点が転換して、その時その登場人物がある対象を知覚している意識が表されている。

この Ying 形式の示す事態は、次の and を用いた事例と比較すれば、一層明確なものとなる。

- (22) Wally sat in a chair gently tilted backward and stared into space. (Christie<sub>3</sub>: 35)
- (23) Two years later, Julie and I stood at Heidi's high school graduation and watched our little "light" walk up for her diploma. (R. D.<sub>4</sub>: 110)

(22)は、TPS の場合で、(23)は、FPS の場合であるが、共に、and 以下の知覚を示す部分は、登場人物 Wally と SELF としての“I”の内側から描いた事態ではなく、第三者的立場、つまり、その人物の外側から描いた事態を表している。

#### 1.2.2.2 Gタイプ

この場合は、FPS だけが対象となる。

- (24) That evening we sat with two Pakistani friends, drinking tea and nibbling the peppery mutton puffs. (Woodcock: 16)
- (25) I was sitting on a wall just above them, supervising the job. (R. D.<sub>1</sub>: 92)

(24)の場合、Xでは、語り手としての“I”が自分たちがパキスタンのあるホテルの食堂にいたということが示され、Ying 形式では、視点の移行により、SELF としての“I”が tea を飲み、mutton puff を食べている意識が描かれている<sup>20</sup>。

(25)の場合、Xにも進行形が用いられているので、Xは、SELF としての“I”の壁の上に座っている意識を示し、Ying 形式でも、SELF としての“I”が仕事を監督している意識を表している。つまり、(25)は、まさに過去のある時点で、SELF としての“I”がある出来事と体験している様子を如実に描いたものである。

この G タイプの X、Ying 構文は、まず、語り手としての“I”が自分自身のある特定の場所における存在を提示し、それから、視点を転換して、その時の SELF としての“I”がある行為を行っている意識を表している。

### 1.2.3 Ying 形式の機能

以上のように、この範ちゅうの X、Ying 構文は、一般的に述べると、Xでは、第三者（語り手）の立場からの描写が行われ、Ying 形式では、視点が移行して、SELF としての“*I*”、または、登場人物の立場から見た事態が示されたものである、とすることができる<sup>21</sup>。

さらに、タイプ別にもっと詳細に述べると、Eタイプでは、Xは、第三者的立場から描かれたある登場人物の知覚または知覚に基づく同定化を示し、Ying 形式は、その時その人物が他の登場人物、または、事物の状態を知覚している意識を表している。Fタイプでは、Xは、語り手によって述べられたある登場人物のある特定の場所における存在を示し、Ying 形式は、その時その人物がある対象を知覚している意識を表している。Gタイプでは、Xは、語り手としての“*I*”によって述べられた自分自身のある特定の場所における存在を示し、Ying 形式は、その時 SELF としての“*I*”がある行為を体験している意識を表している。

したがって、Ying 形式の機能は、Eタイプの場合、SELFとしての“*I*”、または、ある登場人物がXにおけるある対象の状態を知覚している意識を、Fタイプの場合、SELF としての“*I*”、または、ある登場人物がある対象を知覚している意識を、Gタイプの場合、SELF としての“*I*”がある行為を行っている意識を表すことにある、とすることができよう。

## 2 Ying 形式の機能的特性の一般化

この節では、前節での機能分析から明らかになった Ying 形式の機能的特性を一般化した形で表してみる。まず、Ying 形式の機能をタイプ別にまとめてみよう。

#### (a) A, B, C, D タイプ

知覚者 (SELF としての“*I*” (FPS の場合)、または、登場人物か語り手 (TPS の場合)) がXにおけるある対象の行為、または、状態を凝視している意識を表す

#### (b) Eタイプ

SELFとしての“*I*”、または、ある登場人物がXにおけるある対象の状態を知覚している意識を表す

#### (c) Fタイプ

SELF としての“*I*”、または、ある登場人物がある対象を知覚している意識を表す

#### (d) Gタイプ

SELF としての“*I*”がある行為を体験している意識を表す

なお、(a)の意識は、自分以外のものに対する意識のことを、(b)・(c)・(d)の意識は、自分自身に対する意識のことを意味している。

以上のことを、一般化していうと次のようになる。

- (26) Ying 形式の機能は、過去のある時点 (NOW-in-the-PAST) において、意識の主体がある出来事を体験している時の意識を表すことにある<sup>22</sup>

### 3 Ying 形式の表現効果と新しい解釈の仕方

ここでは、第2節での Ying 形式の機能を一般化した規定に基づいて、Ying 形式の表現効果が何であるかを検討し、さらに、Ying 形式の新しい解釈の仕方の可能性を試みしてみる。

Ying 形式が、上で規定したような機能的特性をもつとするなら、Ying 形式が示す事態は、作者が、ある過去の体験を、単に過去の出来事として客観的に描いたものではなく、意識の主体の意識を通して今まさに体験しているものとして描いたものであると言える。そうすると、作者の意図は、Ying 形式を用いることによって、われわれ読者の眼前に、今まさに体験している、意識の主体の内側から見た内面的事態を展開させ、その意識の主体の内面に、われわれ読者を引きこんでいくことにあると言えるだろう。つまり、Ying 形式は、読者が、まるで、意識の主体——登場人物か SELF としての “I”——と共にある出来事を体験しているかのよう、読者に錯覚を起こさせ<sup>23</sup>、臨場感 (presence) や迫真性 (realness) を感知させる働きをもっていると言っても過言ではないだろう。

したがって、Ying 形式の表現効果は、次のように規定することができる。

- (27) Ying 形式の表現効果は、今まさに体験しているという臨場感とか迫真性を与えて、読者を物語の中にひきつけたり、ひきこんだりすることにある

それでは、Ying 形式は、どのように解釈されるべきであろうか。上で述べた Ying 形式の表現効果を、逆に、読者側から見ていくと、この間に答えられる。つまり、読者は、Ying 形式を通して意識の主体の内面に入りこんでいき、その人物と一体となり、その人物の立場に立ってその人物と共に出来事を体験することになるのである。その人物がある対象を見ていると、われわれもその対象を見、その人物がある行為を体験していると、われわれもその行為を体験することになる。

したがって、従来の Ying 形式に対する解釈 (Ying 形式は主文 X のある対象についての外面的な物理的状态を表すとする解釈) を平面的解釈と呼ぶとすれば、ここに、その解釈とは異なった新しい解釈の仕方、すなわち、Ying 形式が示す事態を意識の主体と同じ立場に立って共に体験しているものと解釈する、立体的解釈が成立することになる<sup>24</sup>。

#### 4 ま と め

以上、本稿では、まず、視点の問題を取り入れた認識論的観点に基づいて、具体的に作品の実例を参照しながら、冒頭で示した(A)―(G)タイプの X、Ying 構文が典型的に現れる場面・状況をかなり綿密に分析し、Ying 形式の談話における機能的特性を明らかにした。つぎに、その検出された四種類の機能的特性を一般化した形で、Ying 形式の機能は、意識の主体が過去のある時点である出来事を体験している時の意識を表すことにある、と規定した。さらに、その規定に基づいて、Ying 形式の表現効果は、今まさに体験しているという臨場感とか迫真性を与えて、読者を物語の中にひきつけたり、ひきこんだりすることにある、と指摘した。また、これまでの Ying 形式に対する解釈、つまり、平面的解釈とは異なった立体的解釈が可能であることを示した。

本稿は、視点の問題を導入した認識論的観点に基づく談話分析の一例であるが、この接近法は、従来の文法の中のある種の現象の再整理を可能にし、また、テキスト解釈を行っていく際に、新しい意味解釈の仕方を与えてくれるものと考えられ、今後とも、さらに、新知見の発見が期待できるものであると言える。

#### 注

- \* 本稿は、1984年6月17日、関西英語学談話会（於大阪市立大学）で口頭発表した内容に基づいている。
- 1 (A)(B)(D)(F)(G)タイプの場合、Ying 形式は、主文Xの述詞を修飾し、いわゆる、付帯状況 (attendant circumstances) を表す、と説明されている。また、(C)(E)タイプの場合、Ying 形式は、主文Xの名詞句を修飾したものとか、主文Xに付帯的に付加されたものである、と説明されている。
  - 2 小説やそれ以外の Reader's Digest の中における物語的テキストを含むものとする。
  - 3 拙稿（1984）では、認識論的観点に基づいて、一般に「時」・「理由」の用法を表すとされている分詞構文の前置された場合を論じた。
  - 4 認識論的観点に基づいて行われた最近の研究の概要については、拙稿（1984）を参照。
  - 5 Xで一つの知覚段階が終了し、Ying 形式でまた別の知覚が行われることを意味する。
  - 6 本稿では、一人称小説の“I”の二つの機能を、Banfield（1982）の**ことば**を借りて、語り手としての“I”と SELF としての“I”と呼ぶことにする。なお、SELF としての“I”は、一般的には、split ego とか「目撃者」としての“I”とか「登場人物」としての“I”とか呼ばれているもので、過去の出来事に対して過去の反応を示し、出来事を体験する“I”のことである。
  - 7 以下、Xの部分は、――で、Ying 形式の部分は、――で表示することにする。
  - 8 ここでの looking は、後に 1.1.3 で論じるように、次の事例のような進行形と同じ機能を果たしているものと考えられる。

I lowered the glasses. Without a word I handed them back to Norton. He did not meet my eyes. He was looking worried and perplexed. (Curtain: 152)

- “I” が Norton に双眼鏡を戻した時、彼は、“I” に目を合せなかった。そこで、変だと思い、“I”は、彼の表情をじっと見つめて様子をうかがっている。つまり、この場合の進行形は、SELF としての “I” が he の表情を凝視している意識を反映している、とすることができる。詳細は、拙稿 (1981) を参照。
- 9 本稿での事例は、FPS か/と TPS の典型例だけ示されるが、問題の X, Ying 構文は、小説のタイプにかかわらず両者に生起するものと考えられる。したがって、知覚する人物を一般化して示す場合、SELF としての “I” とか登場人物とか語り手とかの区別をせずに、〈知覚者〉として表すことにする。
- 10 文頭に置かれた分詞句は、一般的には、形容詞的な動きをするものとして説明されている。が、それを談話の中で考えると、この事例のように、ある対象の状態を知覚している、厳密に言えば、凝視している意識を読みとれる場合もある。他に、凝視している状況を明確に示す事例を二例あげておく。
- ( i ) Then the door of the shop opened again and standing in the doorway, wearing a tweed suit, strong brown brogues and carrying a bunch of flowers in her hand was the unforgettable woman I had first seen at Sotheby's sale and later in France. We stood staring at each other in startled silence (Scholefield: 142)
- ( ii ) The thick oak doors opened suddenly, and Annie froze on the spot, her mouth open in astonishment. Standing in the doorway, almost filling it was the tallest man Annie had ever seen. (Fleischer: 42)
- 11 この X の部分の認識過程を、もっと分解的にスローモーションカメラのようにたどっていくと、Bob は、まず、動きの方向 (out) を、それから、動きそれ自体 (came) を知覚する。さらに、その動くものを知覚して、それが飛行機の乗務員であることを知る、となるだろう。なるほど、論理的には、この認識過程も可能であるが、この部分は、あくまでも文学的表現の一コマで、これほど細かい認識を反映していると言えるかどうかは疑問である。したがって、本稿では、この立場を取っていない。
- 12 Poirot が、頭がとても痛いので、煎薬 (tisane) がほしい、と言った丁度その時、Hassan が湯気の立つ茶碗をもってきたので、それが Poirot の言った煎薬であればよいがという “I” の期待のことである。
- 13 事例(3)のすぐ後の場面で、同様に、Bob は、庶子の Jean-Claude が税関から出てくるのを今か今かと待っているところである。
- 14 さらに、Bob が、その少年の状態をも凝視していることが、who was clutching... の文からわかる。なぜなら、この進行形は、拙稿 (1981)・(1982) で指摘した「凝視」の機能がかかわっていると考えられるからである。
- 15 実際の認識では、当然、知覚して同定化するがふつうであるが、ここでは、事例(1)と異なって、単に知覚のみを示し、同定化は問題となっていない。
- 16 Russell (1940: 205) には、

Suppose I say “there is a red flower,” because (in ordinary parlance) I see a red flower.

という指摘がある。

- 17 Caddy stepped over it... 以下の文によって、“I” がしばらくの間かえるを眺めていたことが示唆されている。
- 18 Torii (ed.) (1982: 25-30) を参照。
- 19 拙稿 (1982) では、進行形を心理的装置と見なし、進行形は、送信者が対象を見つめている、また、

## X, Ying 構文における Ying 形式の談話機能と表現効果について

対象に意識を向けている心理的時間を反映したもの、と規定した。「凝視」の機能は、この概念のもとに収束する三つの機能のうちの一つである。詳細は、拙稿(1982)を参照。

- 20 この事例は、ある旅行会社の旅行案内書の中の一節であるが、Thompson (1983) では、この Ying 形式 (drinking tea and nibbling...) は、この案内書を読んでいる人を、実際に、tea を飲んだり、mutton puff を食べている気分にする働きをする、と述べている。
- 21 このように、出来事を、最初、第三者の立場から描写し、途中で登場人物の立場に移っていくという表現方法は、映画やテレビでも見ることができる。この点については、Miura (1980: 238-244) に興味深い論述が見られる。
- 22 この一般化された規定は、拙稿(1984)で示した「時」・「理由」の用法を表すとされている分詞構文の規定とまさに同じものである。

なお、厳密に言えば、この Ying 形式の機能的特性は、Ying 形式の ing 形式それ自体の特性とも言えるが、ここでは、便宜上、Ying 形式全体の特性としておく。
- 23 物語は、通例、過去の出来事が書かれ、また、過去のものとして書かれるので、Ying 形式によって、読者に、ある出来事を今まさに体験しているという錯覚を起こさせることになる。
- 24 この Ying 形式の表現効果および解釈の仕方の正当性を支持する主張として Thompson (1983)、Tannen (1982)、Miura (1980) をあげることができる。

Thompson (1983: 45-50) では、本稿で論じた X, Ying 構文の一部を含めて、いわゆる、分詞構文を detached participles と呼び、これらは、イメージを喚起する (evoke an image)、つまり、実際に出来事を体験したらどうなるかということを、読者の想像力の中に呼び起こす (conjure up in the reader's imagination what the actual experience of events would be) ことを意図した談話に生起する、と述べている。なぜ、このような効果が生ずるのかという要因については、全く触れられていないが、㊦で示した Ying 形式の表現効果とはほぼ同趣旨のことが論じられている。

Tannen (1982: 18) では、文学と短い物語(この場合口頭による)の目的は、物語のもつ視点との一体感によって読者の心を動かすこと (a short story, like other genres of imaginative literature has its goal... to move the reader emotionally through a sense of involvement with its point of view) である、と述べている。これは、物語全般についての指摘であるが、本稿で論じた Ying 形式も、この機能を担っていることがわかる。

Miura (1980) では、表現を理解することは、話し手の立場に立って追体験することである、と述べている。まさに、本稿で論じた Ying 形式は、われわれ読者を追体験させてくれるものである。

以上のように、この三者の出張は、本稿で論じた Ying 形式の表現効果および解釈の仕方の正当性を裏づける重要な論拠になるものと考えられる。

## 参 考 文 献

- Banfield, A. 1973. "Narrative style and the grammar of direct and indirect speech." *FL* 10, 1-39.  
\_\_\_\_\_. 1982. *Unspeakable sentences: narration and representation in the language of fiction*.  
Routledge & Kegan Paul.
- Benveniste, E. 1971. *Problems in general linguistics*. Mary Elizabeth Meek (trans.) University of Miami Press.
- Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse analysis*. Cambridge University Press.
- Bolinger, D. 1977. "There." In *Meaning and form*, 90-123. Longman.
- Booth, W. C. 1961. *The rhetoric of fiction*. The University of Chicago Press.
- Chatman, S. 1978. *Story and discourse: narrative structure in fiction and film*. Cornell Univer-



- sity Press.
- Christensen, F. and B. Christensen. 1978. *Notes toward a new rhetoric*. Harper & Row.
- Culler, J. 1975. *Structuralist poetics*. Routledge & Kegan Paul.
- Fowler, R. 1977. *Linguistics and the novel*. Methuen.
- Fox, B. 1983. "The discourse function of the participle in ancient Greek." In F. Klein-Andreu (ed.) *Discourse perspectives on syntax*, 23-41. Academic Press.
- Friedman, N. 1955. "Point of view in fiction." *PMLA* LXX, 1160-1184.
- Hathaway, L. H. 1982. "Style shifting as metaphorical change in point of view." *CLS* 18, 185-190.
- Iser, W. 1978. *The act of reading: a theory of aesthetic response*. Longman.
- Kitahara, Y. (北原保雄) 1984. 『文法的に考える——日本語の表現と文法』大修館。
- Kuroda, S. Y. 1973. "Where epistemology, style and grammar meet: a case study from Japanese." In S. R. Anderson and P. Kiparsky (eds.) *A festschrift for Morris Halle*, 377-391. Holt, Rinehart and Winston.
- Kuno, S. (久野暉) 1978. 『談話の文法』大修館。
- Langacker, R. W. 1982. "Space grammar, analysability, and the English passive." *Lg* 58, 22-80.
- \_\_\_\_\_. 1982. "Remarks on English aspect." In P. J. Hopper (ed.) *Tense-aspect: between semantics and pragmatics*, 265-304. John Benjamins Publishing Company.
- Leech, G. N. and M. H. Short. 1981. *Style in fiction*. Longman.
- McCawley, N. A. 1977. "What is the 'emphatic root transformation' phenomenon?" *CLS* 13, 384-400.
- Miura, T. (三浦つとむ) 1980. 『日本語はどういう言語か』講談社。
- Noguchi, T. (野口武彦) 1980. 『小説の日本語』中央公論社。
- Ohe, S. (大江三郎) 1984. 『英文構造の分析——コミュニケーションの立場から』弓書房。
- Polanyi, L. 1981. "Literary complexity in everyday storytelling." In D. Tannen (ed.) *Spoken and written language: exploring orality and literacy*, 155-170. Ablex.
- Pratt, M. L. 1977. *Toward a speech act theory of literary discourse*. Indiana University Press.
- Prince, G. 1982. *Narratology*. Mouton.
- Russell, B. 1940. *An inquiry into meaning and truth*. George Allen & Unwin.
- Sato, N. (佐藤信夫) 1978. 『レトリック感覚』講談社。
- \_\_\_\_\_. 1981. 『レトリック認識』講談社。
- Steever, S. B. 1981. "A functional constraint on auxiliary verbs: the contrast of discourse versus narrative." *CLS* 17, 383-391.
- Tannen, D. 1982. "Oral and literate strategies in spoken and written narratives." *Lg* 58, 1-21.
- Teramura, H. (寺村秀夫) 1983. 「付帯状況」表現の成立と条件」『日本語学』2, 38-46.
- Thompson, S. A. 1983. "Grammar and discourse: the English detached participial clause." In F. Klein-Andreu (ed.) *Discourse perspectives on syntax*, 43-65. Academic Press.
- Torii, S. (ed.) (鳥居修晃 [編]) 1982. 『現代基礎心理学 3 知覚II 認知過程』東京大学出版会。
- Yamaoka, M. (山岡實) 1980. 「動詞 think の提起する諸現象に関しての意味論的・語用論的分析」『Queries』17, 62-80.
- \_\_\_\_\_. 1981. 「状態動詞の進行形に関する一断章」『語学の手帖』2, 16-21.
- \_\_\_\_\_. 1982. 「Stative Progressive の機能的側面についての一考察」『Queries』19, 9-24.
- \_\_\_\_\_. 1984. 「分詞構文における Ing 形式の機能的特性とその談話機能」『Queries』21, 23-36.
- Yasui, M. (安井稔) 1982. 『英文法総覧』開拓社。
- \_\_\_\_\_. 1983. 「修飾ということ」『日本語学』2, 10-17.
- Weinrich, H. 1982. 『時制論』脇坂豊(訳) 紀伊国屋書店。

Wolfson, N. 1982. *The conversational historic present in American English Narrative*. Foris.

例文の出典

Christie, Agatha.

Christie<sub>1</sub>=*Crooked House*. 1980. Fontana.

Christie<sub>2</sub>=*Poirot Investigates*. 1982. Bantam.

Christie<sub>3</sub>=*They Do it with Mirrors*. 1975. Fontana.

Christie<sub>4</sub>=*Curtain*. 1977. Pocket.

Corder, E. M.

Corder=*The Deer Hunter*. 1980. Coronet.

Faulkner, William.

Faulkner=*The Sound and the Fury*. 1970. Penguin.

Fleischer, Leonore.

Fleischer=*Annie*. 1982. Ballantine.

Hemingway, Ernest.

Hemingway="The Killers." In *Men without Women*. 1969. Penguin.

Higgins, Jack.

Higgins=*The Savage Day*. 1967. Pan.

Kotzwinkle, William.

Kotzwinkle=*Superman III*. 1983. Warner.

McCullers, Carson.

McCullers=*The Ballad of the Sad Café*. 1981. Penguin.

Murdoch, Iris.

Murdoch=*The Bell*. 1967. Penguin.

Segal, Erich.

Segal=*Man, Woman and Child*. 1980. Granada.

Scholefield, Alan.

Scholefield=*Point of Honour*. 1980. Pan.

Woodcock, G.

Woodcock=*Asia, Gods and Cities*. 1966. Faber and Faber.

Reader's Digest.

R. D.<sub>1</sub>=1981. 9    R. D.<sub>2</sub>=1982. 11    R. D.<sub>3</sub>=1983. 3    R. D.<sub>4</sub>=1983. 7    R. D.<sub>5</sub>=1984. 5